

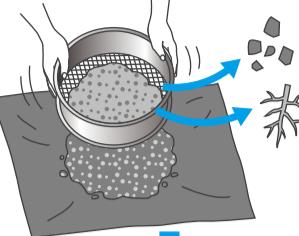
# ガーデニング



## 鉢植えで使った古土の再生法

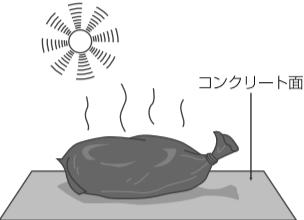
鉢植えで1度使用した土は、土の団粒構造がくずれているうえ、害虫やその卵、病菌などが入っていることがあるのでそのまま再度使うことはできません。不純物を取り除き、殺菌して使用しましょう。

ビニールシートなどの上に古土を広げ、ゴロ石や根、肥料カスなどを取り除いてから7~10mmのふるいにかけ、乾かした状態でポリ袋に入れ、真夏か真冬まで保存しておく。



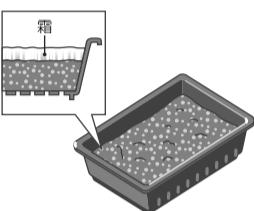
### 真夏の場合

晴天が続く夏に湿った土をビニール袋に1/3程度入れて密封し、コンクリート面に置いて4~5日、直射日光に当てる太陽熱で蒸気消毒する。



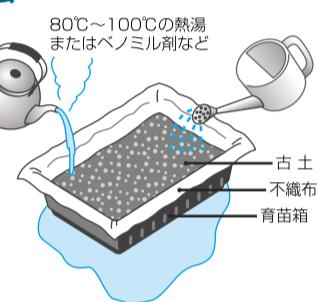
### 真冬の場合

霜が降りる寒冷地なら、3週間に1度くらいの割合で上下を入れ替えるように土を混ぜながら春まで屋外に放置するのも方法。霜によって害虫が駆除されるとともに、風化してさらさらした土質になる。

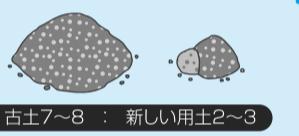


### すぐに使いたい場合の方法

夏や冬まで待てない、すぐ使いたいという場合は、ほぐしてゴロ土や根などを取り除いた土を不織布を敷いた水ハケのよい容器に入れ、水が流れるほどジョーロでたっぷり水をやって消毒するとい。もっと消毒効果を高めたいときは、水のかわりに80~100°Cの熱湯かペノミル剤やTPN剤の1000倍液をかけると効果的。



古土には2~3割の新しい用土（赤玉土7に腐葉土かピートモスを3加えたものなど）を混ぜ合わせて使用するようしましょう。



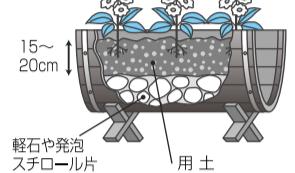
古土7~8 : 新しい用土2~3

## コンテナガーデンの楽しみ方

### One Point Advice

#### 大きなコンテナを使う場合の注意点

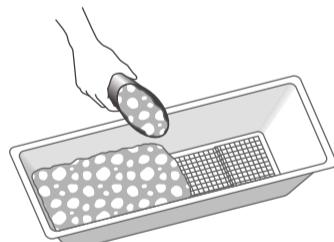
大きなコンテナにぎっしり土を入れると、重くなるばかりか、水はけが悪くなり根腐れしてしまいます。通常、容器栽培で植物が必要とする土の深さは15~20cm程度なので、それより下は軽石や発泡スチロール片などを用いるとよいでしょう。



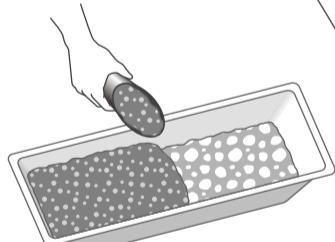
## コンテナガーデン

ベランダやテラス、アプローチなどでの花の演出に欠かせないのがコンテナ。小さな庭でのアクセントにも効果的です。

1 プランターの水抜き穴を鉢底ネットでふさぎ、下から1/4くらいの高さまでパーライトを入れて平らにする。

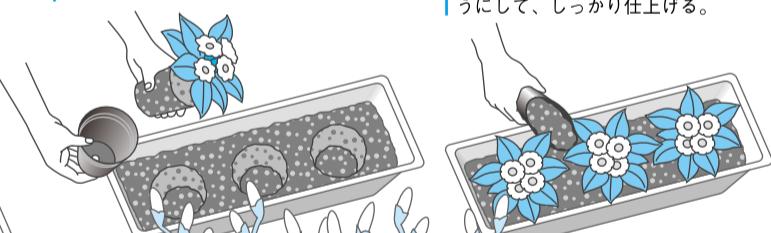


2 プランター用培養土に緩効性成肥料を加えて、よく混ぜ合わせたものをプランターの八分目まで入れる。



## プランターへの苗の植え付け方

3 苗の根が埋まる程度の穴を掘る。苗は鉢底の穴から指を入れて押し出すようにしてそっと出し、表面の土を崩さないように穴に入れる。



4 葉が埋まらないように気をつけながら、土を足す。水やりをすると土が目滅りるので、棒などで土をつづいてすき間ができるたら土を入れるようにして、しっかり仕上げる。



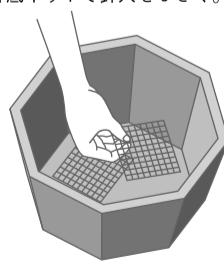
5 花に水がかからないように注意し、底から水が流れ出るくらいたっぷり水をやったあと、霧吹きで葉についた土を落とす。



POINT  
今後の成長を考え、あまり間隔を詰め過ぎないようにして植えることが大切。また、苗を購入する場合は、葉に病気がないかよくチェックし、茎が伸びていない元気な苗を選択しましょう。

## 寄せ植えの作り方

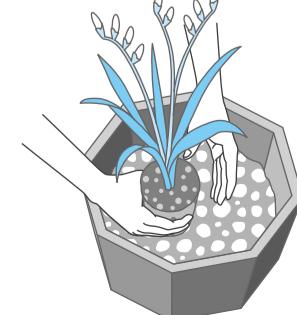
1 鉢底ネットで鉢穴をふさぐ。



2 パーライトを容器の深さの1/4ほど入れて平らにならし、元肥として緩効性の成肥料をまく。



3 寄せ植える植物の中で背丈があるものを選び、パーライトの上に立つように押さええる。



4 寄せ植えの場合、株の根元の高さが同じになるように植えるのがポイント。背丈が高い植物を植えたら、次に植える植物の背丈を考慮して全体にプランター用培養土を足しながら、花の高さや色を考慮してバランスよく植えていく。



5 植え込みが終わったら棒などで土をつづき、すき間ができるたら土を足す。最後に、葉についた土を霧吹きで落とす。



POINT  
寄せ植えは育つ環境が似たものの同士を組み合わせるのがポイント。そうすれば、用土も、植えた後の管理法もひとつで済むので手軽です。性格が異なる植物を同じ容器に植える場合は、片方を鉢のまま植え込んだり、ビニールやプラスチック板などで鉢を仕切るなどして、それぞれの植物に合った用土、管理法で育てるようしましょう。

## 容器栽培の管理法

### 水やり

表面が乾いたらたっぷり水を与えるようにする。プランターの底に栓があるものは、通常はあけておいた方が水はけがよい。

### 施肥

速効性の液肥が効果的。ただし、一度にたくさん肥料を与えると枯れてしまうことがあるので注意。1週間に1度与えるタイプの液肥なら、水を加えて半分の濃度にし、それを3~4日に1度の割合で施すようにすると肥料のけ過ぎによる失敗を減らすことができる。

### 土の補給

水やりによって、土が流出したり目滅りすることがある。根が露出する前に、早めに土を捕ってやるようにしよう。

